

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 和田 忠彦

学位申請者 小久保真理江

論文名

Pavese tra letteratura e cinema: nuove prospettive sul mito americano

（邦訳題：パヴェーゼ、文学と映画-アメリカ神話に関する新たな解釈）

結論

小久保真理江氏から提出された博士学位請求論文 *Pavese tra letteratura e cinema : nuove prospettive sul mito americano* について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して、ボローニャ大学との共同指導共同学位制度に基づき授与される博士（学術）の学位にふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、和田忠彦を主査に、副査として、松浦寿夫、博多かおる の両指導委員会委員に加え、共同指導共同学位制度に基づく最終試験である点を踏まえ、村尾誠一研究科長ならびに黒澤直俊言語文化専攻長から成る5名で構成された。

論文の概要

本論文は、これまで多様な文脈で用いられてきたイタリアにおけるアメリカニズムの現象を指す用語「アメリカ神話」に焦点を当てることによって、作家チェーザレ・パヴェーゼとアメリカ文化との関係について、比較文学・比較文化論的アプローチを駆使し、従来イタリア学においては主張されたことのない斬新な解釈を提示した独創的な論文である。この点については、前掲の「ボローニャ大学における審査概要」において評価されている諸点が、共同指導共同学位協定先で行われた審査会において外部より招聘した比較文学界の泰斗マリオ・ドメニケッリ氏の推挙によりあたえられた評価であることを附言するに留める。

本論文は三章から成り、各章においてそれぞれ異なる側面から考察がなされている。まず第一章では、伝記・批評に関する考察、第二章では歴史文化背景に関する考察、第三章ではパヴェーゼの詩作品に関する考察が展開される。この構成により、パヴェーゼとアメリカ文化との関係について多角的な議論を構築することに成功している。

以下に各章の概略を述べる。

第一章：パヴェーゼとアメリカ文化：書誌と批評的受容

伝記・批評の側面を取り上げた第一章は二つの節で構成される。

まず第一節では、パヴェーゼとアメリカ文化との関係が伝記的側面から論じられる。パヴェーゼは若い頃からアメリカ文化に強い関心を抱き、アメリカ文学の翻訳・批評に携わったが、アメリカへの関心は、文学以外にも映画・音楽・社会など多岐にわたり、なかでも映画には特に強い関心を寄せていた。パヴェーゼはアメリカ文学に傾倒する以前の1920年代からトリノの映画館に足繁く通っており、アメリカ文化との最初の接点は映画であると言える。例えば、パヴェーゼが17歳のときに英語で書いた手紙の原稿にはアメリカ映画やそこに登場する女優の美しさにたいする情熱が綴られおり、これはアメリカ人女優リリアン・ギッシュとドロシー・ギッシュに宛てられた手紙であると考えられている。その後パヴェーゼは1925年から1930年にかけて、短い映画評論も複数書いており、そこには新しい芸術としての映画に関する美学的考察が綴られている。1930年代になるとパヴェーゼはアメリカ文学へと、より傾倒し、映画評論を書くことはなかったが、生涯映画には関心を寄せつづけた。戦後には恋人のアメリカ人女優のために映画原案も複数書いている。この節では、こうした書簡や日記等の伝記的資料をもとに、特に映画との関係に注目しながらパヴェーゼの人生をたどりなおし、映画への関心がアメリカ神話形成にとって重要な役割を果たしたことが示されている。

続く第二節では、パヴェーゼのアメリカ神話に関する多数のコメントや研究論文を1941年から2011年まで時代順に整理・分析し、いくつかの傾向や重要な論点を明らかにしている。パヴェーゼとアメリカ文学の関係については1940年代から多くの議論や研究が存在するが、なかでも1960年代に発表されたドミニク・フェルナンデスの研究はその後の展開に大きな影響を与えたと言える。1970年代から1980年代までフェルナンデスの議論を複数の方向に発展させるかたちで同主題に関する研究が進み、1990年代にはアメリカ神話については論じ尽くされたかのようにもみえたが、2000年以降には、それまでの定説を見直す複数の研究が発表されている。この節では、「アメリカ神話」に関するこうした研究の流れを整理・分析したうえで、論者独自の観点や分析方法が提起される。

第二章：文化的背景：1920年代 30年代イタリアにおけるアメリカ文化

第二章は、1920年代から30年代にかけてのイタリアにおけるアメリカ文化の受容についての考察が四節構成で行われる。

第一節では、1920年代から映画・音楽・出版の分野を中心に、アメリカの大衆文化がイタリアの都市部で普及していった背景や過程について論じられる。ファシズム政権とアメリカ文化は通常対立的なものとして捉えられがちであるが、実のところ少なくとも1930年代前半までは外国文化に対する規制は比較的緩く、政治的立場に関わらず多くの

イタリア人が、アメリカの大衆文化に親しんでいたことが近年のいくつかの研究で指摘されている。こうした側面に注目し、この節では、これまで十分に考慮されてこなかったアメリカ大衆文化の普及とパヴェーゼのアメリカ神話との繋がりが論じられる。

その後続く三つの節では、アメリカ社会・文学・映画の三つの領域を中心にパヴェーゼのアメリカについての考察が、同時代の他のイタリアの作家の考察との比較においてなされる。

まず、第二節では、アメリカ社会についてのイタリア人作家の意見を分析し、当時のファシズムとアメリカニズムと間の複雑な関係に光をあてる。多くの研究が示すようにイタリアとアメリカとの政治的関係はファシズム期全体を通してみると必ずしも敵対的ではなかった。こうした側面をふまえ、この節では、知識人のアメリカ社会に対する立場が同じイデオロギーグループのなかでも多様かつ両義的であり、かれらの意見がしばしばアメリカの体現する〈近代性〉に対する複雑な態度を反映していたということが確認される。さらに、パヴェーゼが1930年前後にイタリア系アメリカ人の友人に送った手紙などを参照しながら、パヴェーゼのアメリカ社会についての意見が必ずしも肯定的なものではなかったことが指摘される。

続く第三節では、「世界文学」や「アメリカンモダニズム」に関する近年の議論を参照しつつ、イタリア知識人のアメリカ文学についての議論が分析される。フェルナンデスも指摘しているとおり、イタリアにおけるアメリカ文学紹介者の第一世代と、パヴェーゼやヴィットリーニなどの第二世代との間には大きな違いがある。チェッキやブラーツなどの第一世代とは違い、パヴェーゼやヴィットリーニは、当時のイタリアではまだ十分な評価を得ていなかったアメリカ文学を、普遍的な「世界文学」として高く評価し、アメリカ文学から学ぶことによって新たなイタリア文学を生み出そうとしていた。また、パヴェーゼやヴィットリーニは、同時代の社会の問題を口語的かつ実験的な言語で語るアメリカの小説のモダニティーにとりわけ惹かれていた。こうした側面に目を向け、この節ではパヴェーゼやヴィットリーニのアメリカ神話を「民衆的」「地方的」要素を多く含む「アメリカンモダニズム」への関心として解釈することが試みられる。

第四節では、アメリカ映画に関する作家達の言説を検証したうえで、パヴェーゼの映画論について考察がなされる。ファシズム政権下のイタリアで青年期を過ごした作家の多くはイタリア映画ではなくアメリカ映画に傾倒しており、かれらにとってアメリカ映画は身近な娯楽であると同時に、精神的・知的成長に不可欠な要素でもあったと言える。パヴェーゼもまた、旧弊なテーマやスタイルを繰り返す当時のイタリア映画にはきわめて批判的で、アメリカ映画やドイツ映画、特にキートンやチャップリンの喜劇映画を好んだ。1926年から1930年の時期に執筆されたパヴェーゼの映画評論には特定の映画に関する評価だけでなく、映画という芸術についての美学的考察が記されている。そこからはパヴェーゼが「新しい芸術」「新しい言語」としての映画の未来に大きな期待を寄せていたことが

読み取れる。この章ではこれらの映画論を分析し、パヴェーゼがアメリカ映画の商業主義には批判的でありながらもその前衛性や大衆性を高く評価していたことなどに焦点を当て、前節で取り上げたアメリカ文学論との接点も再提示される。

第三章：『働き疲れて』：アメリカ文学・文化の影響

第三章では、パヴェーゼの詩作品におけるアメリカ文学と映画の影響が、前章で展開した考察とも関連づけながら論じられる。もちろんアメリカ文化の影響はパヴェーゼの小説作品にも見出せるわけだが、この論文ではパヴェーゼの詩集『働き疲れて』に分析対象を絞っている。その理由として、時間的・分量的にパヴェーゼの全ての作品を扱うことが難しかったことに加え、パヴェーゼの映画論における詩論との類似性に特に強い関心を抱いたということが挙げられる。

この章の第一節では、パヴェーゼの詩作品における「民衆的」な登場人物や「日常的」なテーマを分析し、ホイットマンの詩作品やチャップリンの映画作品との類似性・相違点が指摘される。詩集『働き疲れて』には貧しい農民、工場労働者、放浪者、売春婦など貧困者が多く登場し、かれらの日常生活に密着したテーマが中心的に扱われている。また登場人物の行動も、食べる、飲む、働く、眠るなど、肉体的・経済的な必要と結びついた行為、崇高な領域というよりも至極日常的な領域に属するものが多い。こうした側面にはホイットマンとの詩との類似性が見出せるが、両者のあいだには大きな違いもある。ホイットマンの詩において労働者の活力や個人の自由などが称揚されるのとは対照的に、パヴェーゼの詩では日々の労働による疲弊、個人の孤独、都市における疎外感などが強く表現されている。パヴェーゼは、ドス・パソスやスタインベック、ケイン、アンダーソンなど多くのアメリカンモダニズムの作家と同様、ホイットマンの民衆や日常に関する詩学を引き継ぎながら、同時代の社会の否定的側面に光を当てたと言えます。また、パヴェーゼの詩作品における民衆の表象には、1920年代から30年代のアメリカ映画との類似性も見出すことができる。この論文では特にチャップリンの映画との類似性に焦点を当てながら、『働き疲れて』における浮浪者や工場労働者の表象について論じられる。

第二節では、パヴェーゼの詩における視覚に関する言葉や「イメージ (immagine)」の概念について考察し、映画論との類似性が探られる。パヴェーゼの詩では視覚に関する言葉が多く使われているほか、登場人物の視線や仕草、光と影の変化などに重要な役割が与えられている。様々な視点とフレームによって捉えられた断片的なイメージの連なりを喚起させるという点でもパヴェーゼの詩は映画との類似性を持つと言えるだろう。また『働き疲れて』に収められたパヴェーゼの詩論にも映画との接点は見出すことができる。パヴェーゼはみずからの詩における「イメージ」について、詩の物語を構成する様々な人や物とのあいだの「想像的な関係」とであると定義している。この節ではパヴェーゼの「イメージ」の概念と映画モンタージュとの概念との共通性について、映画評論も照らし合わせながら論じられる。また後半ではパヴェーゼの詩とアメリカ文学作品との共通性についても

「イメージ」の概念を鍵に分析し、パヴェーゼがアメリカ文学の「映画的」技法に影響を受けていたという可能性が提示される。

むすび

こうして三章に渡り、本論文では、パヴェーゼのアメリカ神話形成や創作活動において映画が重要な役割を果たしたことの確認がなされる。新しいイタリア文学を生み出すための文体やテーマの探求において、パヴェーゼはアメリカ文学だけでなく映画からも着想を得ていたと考えることができる。本論文では、また、パヴェーゼのアメリカ神話が、民衆的・日常的要素を多く含む「アメリカンモダニズム」への傾倒として解釈可能であることも確認される。こうした「モダニズム」という概念によるアメリカ神話の解釈は、パヴェーゼに新たなラベルを附すことを意図して行ったものではなく、むしろ、その作家像と作品を新たな角度から照らし、国際的な広いコンテクストに位置づけたいという意図のもとに試みられたものである。パヴェーゼとアメリカ文化との関係はイタリア文学研究者だけではなく、多くの研究者、例えば「世界文学」の議論や、モダニズムの様々な形に関心を寄せる研究者にとっても示唆に富むケースであると捉えることができる。今後は、これまでの研究成果をさらに発展させ、同時代の他のイタリア人作家とアメリカ文化との関わりも探るなど、比較文学的視点を取り入れたイタリア研究を進めることを目指したいと述べて論文はむすばれる（なお、巻末には、パヴェーゼとアメリカ神話の関係をめぐる主題について、現時点でもっとも充実した書誌が附されていることも附言しておく）。

審査の概要及び評価

委員が一致して本論文を課程博士論文として傑出した独創性を備えていると評価する要因は、以下の3点に要約される。

- ① 論文には、日米伊三国での研究成果が纏められている。論者は、パヴェーゼ最後の小説『月とかがり火』についての修士論文を執筆中に抱いた関心を出発点に、作家のアメリカ文化への傾倒に関する研究を進めてきた。日本ではパヴェーゼに関する研究が少なく、特に「アメリカ神話」についての研究は、和田（1984年）の論文を例外として皆無に等しいこともあり、この主題についての研究の意義は大きい。また、海外（特にイタリアやアメリカ）において同様の主題に関する先行研究は多数存在するとはいえ、つい近年まで独自性ある議論は構築されてこなかったという状況があり、この意味でも本研究の意義は大きい。アメリカ留学中に行った「アメリカンモダニズム」関連の資料調査の成果を活かして、ドス・パソスやガートルード・スタイン、フォークナーなどパヴェーゼが翻訳した作家を中心に、かれらの「モダニズム」経験からパヴェーゼのアメリカ神話を照射するという着想を得ている点はとくに注目される。

- ② 2009 年出版のパヴェーゼの映画論の分析によって、従来アメリカ文学との関係においてのみ論じられてきたパヴェーゼ研究に新たな視座による斬新な展開を実践してみせたこと。パヴェーゼの「アメリカ神話」を映画と関連づけて考察するという着想を得たことによって、これまで文学と政治という二つの軸で展開してきた数多の先行研究とは異なる角度から主題を論じることが可能となり、それを他に先駆けて実践した。具体的には、先行研究において、イデオロギー的対項図式により政治的解釈に終始してきたパヴェーゼのアメリカ神話に、アメリカ文化受容の輻輳的側面を抽出するとともに、モダニズムと大衆文化の密接な関係に着目することで、パヴェーゼにとってのアメリカ文化が、〈リアリズム〉としては括りきれない、〈アヴァンギャルド〉や〈大衆〉といった要素が複雑に絡み合った混淆様態にある点を究明した独自性。
- ③ 実質 3 年という限られた期間内に、ポローニャ大学大学院において 230 頁余のイタリア語論文を、共同指導体制のもとで完成させ、ポローニャ大学における公開最終試験においても、論証内容だけでなく、文章と方法もふくめ、その独自性が高く評価されたこと。

なお各審査委員より質問もしくは示唆として提起のあった点は以下の諸点である。

- ① アメリカ映画の無声映画からトーキーの誕生という変化がパヴェーゼにあたえた影響はあるのか？ とりわけ1930年代から40年代にかけて興隆を觀た《film noir》があたえた影響の有無についてどう考えるか？
- ② たとえばProustにみられるような、視覚的なものと創造的關係、あるいは触覚的なものとimageの關係はどのようなものだったのか？
- ③ Whitman 以外の詩人、とくにPound のImagism との影響關係は特定可能か？ つまり、必ずしも視覚的イメージに還元されない「感覺の總體」としてのイメージについて、論文中言及のあるEisenstein やFenorosa の東洋にたいする関心との影響關係について考察することの有効性をどのように捉えているか？
- ④ E. Rubichに代表される同時代ドイツの実験映画の影響の有無をどう考えるか、つまりアメリカ映画とドイツ映画の差異をどう見ていたか、について言及が望まれる。
- ⑤ PaveseのWhitman理解にみられるような、モダニズムにおける田舎と都市という異なる対照的特性の混在について、どう考えるか？

だが、こうした質問や示唆にたいする口述試問での応答は、即座に審査委員もまじえた議論へと発展したことをみても判るように、指摘のあった諸点をあらかじめ自覚していたと判断されるきわめて適切なものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した次第である。